朝鮮通信使と日本文化

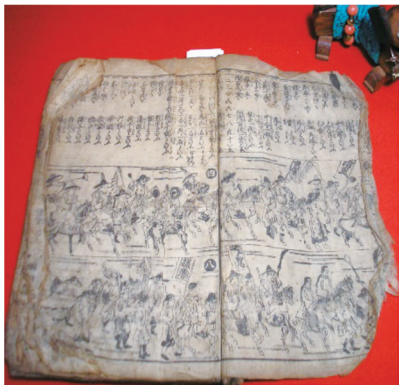
地域共創学部
観光学科
教授
石川 泰成

研究シーズの紹介

日本と東アジア（中国・朝鮮）との文化面での交流は、漢詩・漢文を通じて行われていました。なかでも江戸時代の朝鮮通信使は、1607（慶長12）年に第1回来日から第12回文化8年（1811）まで12回来日し、それら12回の朝鮮通信使と日本の停泊地である対馬、壱岐、福岡県相島、山口県下関・上関はじめ、大阪、江戸には数多くの日本人が漢詩・漢文交流を求めて集まりました。彼らはその交流を詩集や筆談録、書画として残しました。その主要なものはユネスコの世界記憶遺産（2017年）として登録されました。これらの研究は、まさに21世紀にアジア相互の歴史認識を深める基礎文献であり、その活用により地域の観光資源として観光地振興のシーズともなるものです。

Point 歴史教育に活用
- 筆談録や漢詩集を歴史教材として活用が可能です。
- 地元の人物を学習することで、地域の歴史教育に効果があります。

Point 観光資源に活用
- 博物館・美術館での展示や刊行物に活用が可能です。
- 韓国からの観光客を誘致する効果があります。



漢詩・絵画 → 埋もれた歴史遺産を現代に

- ・歴史教育
- ・市民講座

- ・美術館
- ・博物館

期待される活用シーン

- 授業の中で、もっと地元の歴史に基づいた教材はないものか

→ ・江戸時代に地元の文化人が国際交流をしていたことが理解できる。 → 社会科や国語科、博物館や美術館の教材やリーフレットに活用

- 韓国からの観光客
- 歴史ファン
- 観光客

→ ・地域の観光資源として
・研究を利用して、通信使の再現行列、もてなした料理再現イベントへの活用 →

その他の研究テーマ　戦前の日本人作家の中国認識に関する研究